

東序

東序

彦君

彦君よりみやまのにきと號つけた

と見よ

と見よとておこせ玉ひぬさるは氏か

けわ

けわさにてうなひらかもの學ひのす

ちのは

ちのははみおこたりをためさせたまへるみ

に所

に所々なるそのをしへのむろやをうち

られ

られつるとり此阿波の國にて北秀とい

美馬

美馬三好二郡の山路をわけ玉へる道

にあり

にありけりそか中にも目とまるは祖

谷とい

谷といへるあたりの事かき玉へるふしなる

つしこ、はしもいさばるけき深山のおくに

てかりそめに行くへきさかひならねは此國
にうまれし人すら百たりとかそへてつくも
とかいふ數まごはゆき見たりといふもなき
ほとの所なりかし若かはあれども其名はま
たいと高う聞こにわたりてたれやし人もこ
のわたり的事をいはざるはなくまたそれき
かまほしうするひとさへ多きはあやしかも
ひとこゝろなりといふべしさを氏はみつ
さめのならひとはいひながら岩かねのここ
しき路にかつら橋のあやふき谷に雄こゝろ
ふりおこしてこにもしわたりもしたまひつ

、いそしみ物せられしあひたに其所の名所
をさひ彼所の古事をたつねて木のなかれ山
のたゝすまひこゝらにはめなれぬさまと見
ぬいにしへのしのはるゝ跡とをみ筆のはし
るまゝに心ゆくばかりも書きあらはしたま
へるはかのきかまほしうする人に見せもせ
はいかに其心をあくからすらむといとく
をかしきみすきひそかしたゝしかうまをす
はおしなへての序ふりにそのかきいてたま
へることからをひたもの響めてせめをふた
くの類にはあらされはさるよしをひとわた

り申すへし己はあらぬ山ちにはふれありく
、せあるからにあふ年ふと思ひたちてかの
あたりをふみわけたことあなれば此日記
のさまこゝろにおほにありてそゝろに面白
く手にとりたるよりおくをわすれて忽ち
よみをとらる事にてありき然るに己は只は
つかの日數にうちめくれなれば見残した
る所の多かるは更なりそここゝに傳はれり
さきく古き物などは見るとしなくて過きつ
るをあかずくちをしくおもひとりつるに今
是を見ればさしころのおもひのくまをばる

かすこゝちせられて詞の花の咲き出た
さへをかしければおのれよき人にはあらぬ
さよしとよく見てよしとばたへたとなり
けりされとも、しはこれをかの西の市にて
買へりし絹のたぐひならんと云ふ人もあら
んかいなくひとりゆきてめならはぬから
にあきしこりせられしもの、たぐひならめ
やはさるはこのとちふみをひらきて大人か
いたつきのいたれとほとを見はおのつから
あきらかなるへしいてそのこゝろをひとつ
のこしをれにさて

おく山のおとろかしたもかきわけし

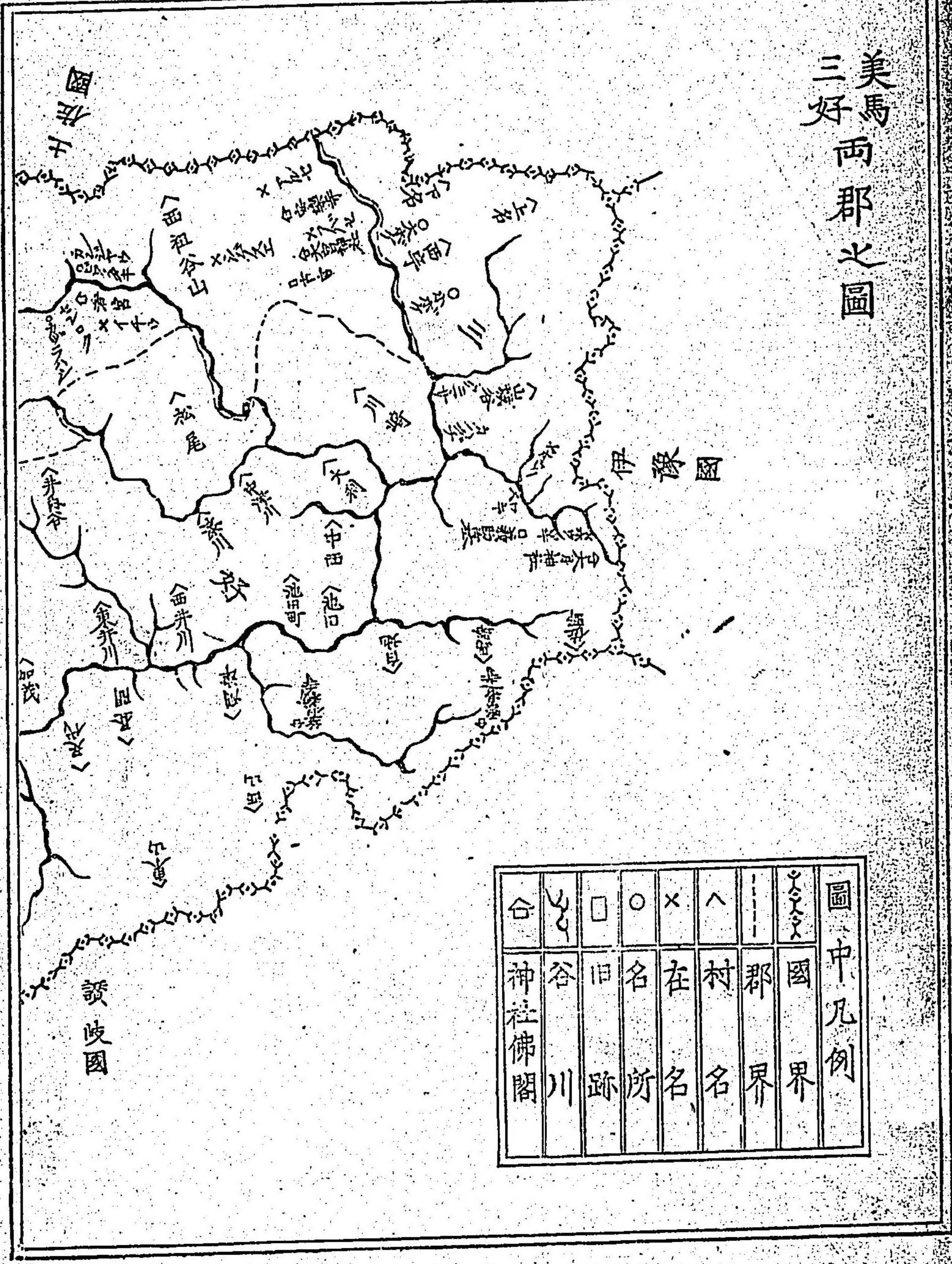
筆のはこひはたさふさりけり

あきらけくおさまるといひてさへせあまり
七とせにならとさしの秋のはしめに

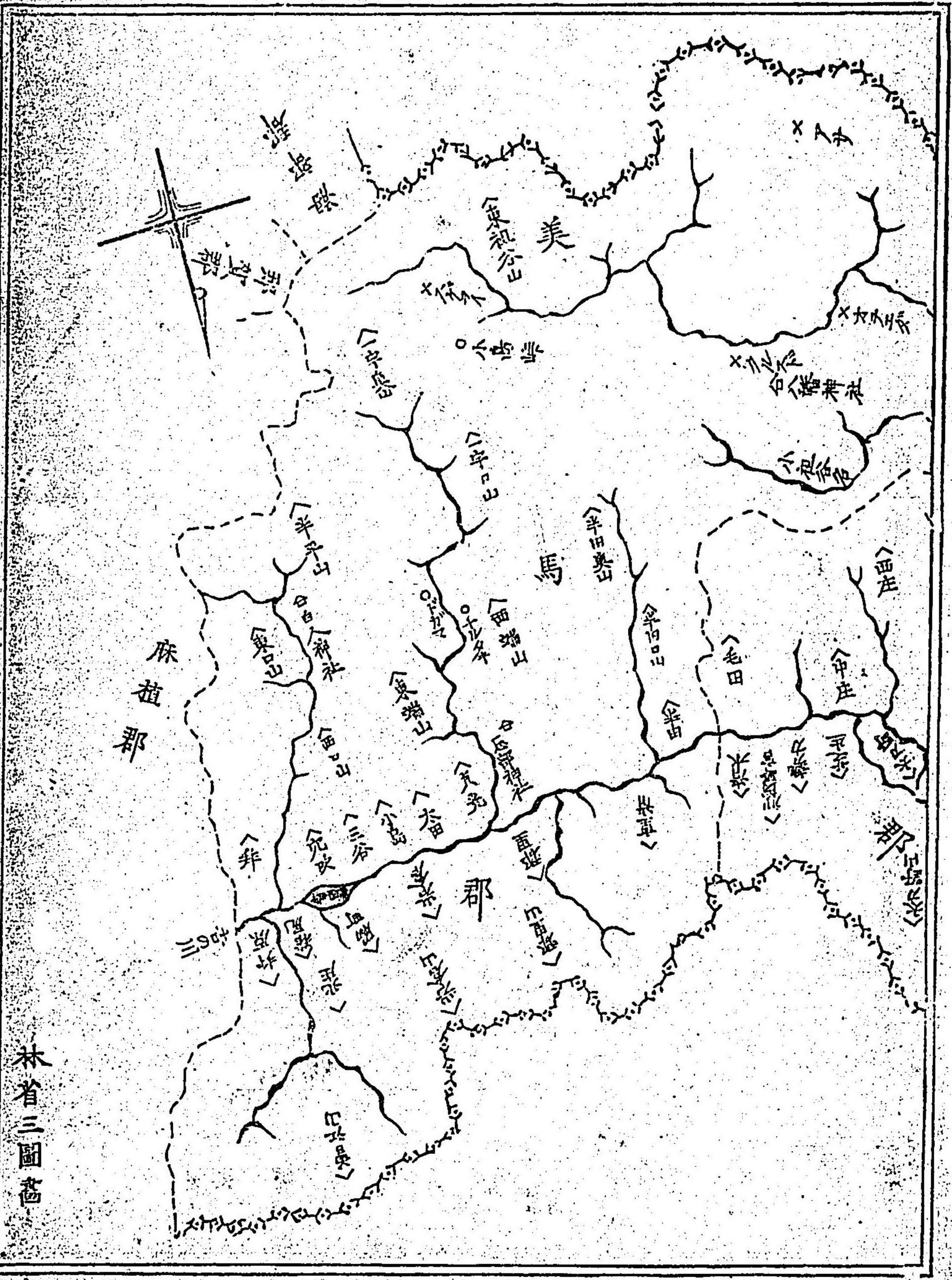
谷千生か

しるす

美馬兩郡之圖
三好



合	山	口	○	×	△	—	〰	〰	〰	圖中凡例
神社佛閣	谷川	跡	名所	在名	村名	郡界	國界	國界	國界	



林省三圖

み山路の日記

小學獎勵試験と申すものは、小学校の子らがわざをため一見て、其よりあゝを知り、劣り優りをわかつて、よくまされるものを褒め、且は、其れとれるをも引きたす、めんとする、わざになんありける。我があがたの令、さきつ年よりこれを行はせたまひて今年も四月の末つかたより、書記官大越の君、ふりは入て此ことに巡らせ玉ひにたり。其隨行には、學務の課の人、中村城戸、足立千兼のうら四人、又、師範学校の教師、岡、桑山のうら二人あまのつきさあがり。たのれは御用の都合よよりて此御わざの中らより進ひたまつりて、さきよめくれる一人と、代はるべき定めなりしを、今、その時のさたりて、まぬくこと、はなりぬ。

五月七日 朝、またきに装ひをなして、車にのりてたつ。空、いとのおかなり。車いそがせて脇町につきて、晝食をとり、さておくに、吉の川の河女のやまへ、みな若衆となりて、夏めくに、霞さへたちまじりて、いとたも一うら

人へは遠くをゆく来り。冬は、装ひもせらぎに、山に上りてはゆるく、平らかに
るせらるるなり。此所よ見見しに、讃岐の國伊豫の山、海も島も目のたつたに
見ゆて、なほてきてはなほ一もあや。雨ぬりみぬらきみ、くもるかたれも入は晴せ、
海山見ゆつかくれつ、めも何やよをか。晴れある日よは、中へ見どころたか
かるへ。さへむらも寺のたつたに。さへむらも、たる人をよめて、見るまよ、此處
よ、何からななる機敷つくらせて、酒をかかへ、さへむらも、さへむらも、さへむらも。
さてかねてよて来たる遠眼鏡よて見ゆて、なほとかくまをいとよく見ゆ。かくもた
も、さへむらも、めも何やよをか。うたもがなせ、からうてよて
せる長うた。

玉はこの道ゆきなれ、ひさかたの、酒もさへむらも、なほとかくまを、佐野ちよ山に、
うちつれ、あやのたつたに、草のたつたに、さへむらも、さへむらも、さへむらも。
さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、
さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、

さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、
さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、さへむらも、

れ一人へも来つて、さへむらも見て、酒をのみつるも、さへむらも、さへむらも、
さへむらも。

此寺はむかへ元暦のころ、弘法大師の、いまた唐に國へ渡らざれば、ある寺を
建ひきて、此山に、つた木こぼれ、入りしよ、あやしくよ山なりけしは、いさめた
くたをひて、只ひを夜のはに、建てゆけらせし寺なりせうや。其後あひく、乃かて
りありて、今乃堂として、元暦の頃建てしをせたりとぞ。ひちりて、外にいそ、をらされ
ば、上野某、留守居としてけるは、此寺乃縁起の書きも、龜山天皇のめでさせ玉ひ志
といふ三ツ足の蛙乃金の香爐、古き人への書きも。天狗は爪、また、矢は板など
とりして、見せらぎぬ、とりへ、古き寺も、さへむらも、さへむらも、さへむらも、

此形も、顔つき似つかたさからきねほゆる故、昔は、かゝる形は、有りたにや龜山
天皇此御陵を御座せし入と、これたいたうなり。すげに君は、うらるゝには、加賀
此國よも、さる御陵のありといはれま。

十日 雨そほふたを、やうくはるゝをまなり。まがけよ、名残にきて、まじう
ら山よいで見るに、目の下に、白雲や入に柳引きて、なみをうた。まこまに昔より
雲の上とひきけるは、うゝるところをまじうにやとねほらぬう。まこまのふ
登り来し道は、うへり下るよ、やうく雲の中に入れて、ふつこも見るまなりぬ。
りのやうなれども、外より見たらんに、雲なるべし

や入雲をとけ下せば皇御孫の、ゆより玉ひ一昔をぞ思ふ「まこま」口すとひつ
下りて、十一時ばかりは、白地にうなり。こゝに三木助十郎とふ人の入、宿と
きた見て、例の事たこなしせられぬ。此宿に、家居いとくひうくてみやひびりあり。
十一日 くもたなり。中津ぬい、びん徳島より入れり。かれ、まこまとらへたり

まこま例の事ひるすき一時ばかりは、ひびりてたつよ、舟渡うかへて、昔
の川渡さかのほる。やがて雨ぬりたせ、かき波をた、霧もかづくもあせだ、みな
ぬれぬ。まこま西方のまこまの、岩屋の、まこまあやましくおとらうま見つ、まこまのほり
て、あらま顔をもおひかせてぬくかまよ、大村なる屋の顔をみせよつまつ、此處
より陸がよれほり、さてまた祖谷川の渡りをとりて、川崎村につまぬ。夕六時ころ
あり。道のはと、白地より三里ばかりのりところ。宿は堀川某といふ人の家にて、もと
よりひまの事ゆえせまかれはとて、外にも一所とられてやせりぬ。今宵はすこ一つ
かまこ、入のうちうらふもさうと、まこまの地にぬゆりぬ。

十二日 此村に、學校にてたこまはる。此學校の子らの中に、いたく年たけある
ものにて、はつかに小學の、初めは、五歳なるが、いまをまこまはるは、入の組に
まじれり。ひまこ、あやまがりて、まこまは、あらぬ入のめりまこま、まこまを、まこま
に生徒にてぞありける。三十何まの六つは、まこまの、入にて其名を、岡口基三郎と

んいひける。昔はさばかりいりや一からぬ家あり一を、中さういしく羨して、いせま
づいふはける哉、此男、入はし入にやをばれて、ふとくはげとふそ一とて、やう
くかせぎかへ一と、今も妻子もてる身となれよたれ。なりたち、かくの如くなれ
一かば、て習ふ事も、らせさや一を、只かくてはて一生をすくさんことをくや一
たもひて、さてこそ初めより童入の中よもまじれて、學ぶなれとぞ。あてれあふゆ
ま男あや。されば、業のすくせしるも乃、うちよなれて、御賞めの品をのあさたれ
ひるすき三時ばかりりよ、山城谷村のをさら、舟もて迎へよまわられしり。うき亦其舟
よ乗れて、吉の川をさかのほるよ、巖のひて一面白きと、せのふよもまをせや。川
口といふ所まで、一里があひたはだ一のまよつげや。そこ三番某といふ人の家よ
せりり。

十三日 何さひせきよ、宿をあらて、大野名（當國にては字の下に名の字つけ、よへりされ以下には之を省く）とて

二里ほどある所に行く也。川口より山道をのぼりて、山の中はらを、横つたひに、吉

の川に落ちたる伊豫川を、右に見つゝゆくに、朝ぎりやうくはせと、けいさいとよ
ろ一。一里ばかりゆくに、あひ川ば一といふ橋あり。是は相川といふ所にて、いり
天正のころ、今の池田にをり一太西の一族が、土佐の長曾我部元親が軍を、防ぎあ
一跡なれとかや。橋は伊豫川の両ぎ一の岩ほのいであひて、幅のいと狭きところ
渡せるなれ。長さ五間ばかりもあらむら、岩ほのいとたところく一さまでにつま
ある、川よその水のさかまくさま、又あたりの山くのけいきなど、ゆめいはきを
一。橋をこえて、よき所にやすらひて、ながむれともあらせ。

何やふきは心に、かけきとありあり、山あひ岩はあひ川は一。「あさけにせよ、
きて来つるよきや敷をばして行くに、此とあやもとよれふらき山にて、川のゆる
ては山に、いへるやれく一よあや寺野政支藤川瀬貝などいふところり、川のこた
よあれて、向ひて、八千坊信正などいふせころあり。かくて脇といふ所に、川にせを
る一つ乃岡あり。をう乃上よかこらあり。脇乃神社と申して、昔はまはらあけを脇屋

義助は朝臣に墓なきは、やがて此處を賜ふといふなりとぞ。歴史にても、伊豫乃國にてぞはてらせしときある故、こゝより伊豫乃國境まで、僅らよ一里ばかりなりといへば、昔もこゝも伊豫乃國境なりとて、こゝにて身泊らるれば、すけ乃君乃いてるゝにて、そはかみ朝臣の果てられし時、味方乃勢ひは衰へんことを恐れて、志ばらく、其後故秘れきし由よきけは、其道臣を乃故よの所よ葬りしや、あるべからせ。又、此わたりて、彼は東西に族が、勤王にめられた乃みと志し、一要處なれば、たなじく道臣を其大西を謀りて、ひたりに、此處にてさしりて、葬れしを乃にそやあらんや、いとせたり。さもあらんや。今、祠の中なる石碑の、うしろをればゆる石を見るに、いさぎぬるひて、此御前の両方より、從者などのかとればゆるが、尚十二ばかりを有りて、いと神さびたり。さて此處よ脇一藏といふ人あり。けふもいでむらへられけるを、此人はいへん、義助の朝臣の末なりけるや。されど、家に傳はれる書物などは、何ゆへにいふ、此岡の名を、いへりへてサへのモトとい

ひいとぞ。道祖は本といふこと、うらなげん。道とまよ、ならの大きな枯木あり。此處よてて祝言いひて、いさぎぬるひて。かくてこゝをすきて、坂城といれば、大月といふ所よて、社あり。大月の社を、四所の神社を申して、諸、冊は二神をまつれりとぞ。此處よは、寺ありて、何となくゆるしき處あり。又いよ川を、かなるへ渡りて、左をのほれば、川はたに砂金を掘れる所ありとまけは、とせしめかきて、右よりのほれり。さて半道ばかりはほりて、大野宜芳といふひとの別荘をやら、なせは。高き處よて、川を見下して、けささめたく、家も此のたりに似けなきよまへ入り。さて此處の學校にて、例の事れこもせし、うつ、此學校は、このころ、あらうて建てあけぬきて、けふその開校乃式なれたるはれたり。すけ乃君乃、よませられある祝言いじめて、後、の證ともあるべきと多かれは、こゝに記したかん、大野小學校築造功を蒙へ、本日開校ノ興ヲ舉ク。惟フニ、本學區ハ、縣下僻隅ノ山村、峻峯重疊ノ間ニアリト雖モ、開拓、尤古ク、元弘建武ノ間、齋興ノ格違ニ際シテ、速ク、カヲ王室ニ

盡シ、其遺孽、今尚存スト云フ。近口關ノ既ニ數十ノ校舎ヲ設ケ、教育ノ振フ、蓋シ本
村ヲ以テ、西隔ノ巨學ト爲ス抑以エアル也。今又、獎勵試験ニ際シ、偶々新築ノ成ル
ニ會ヘリ。區民、教育ニ志シノ厚キ、當路者、心カラ盡セルノ深キ、誠ニ嘉尚スヘシ。
更ニ望ム、教官ハ、益々授業ノ改良ヲ勵ミ、當路者ハ、勉メテ前途ノ計畫ヲ怠ラズ、以
テ關村子第ヲ教育シテ、各、自立スル處ヲシメテ、其祖ノ忠魂ニ盡チザラシメンコ
ヲ。若夫、本校生徒ノ業ハ、余親ラ之ヲ試ミ、以テ將其如何ヲ告グル所アラントス。
宿よかへりて、かた四所ノ神社の賢ものごもを、をろがみしが、そこ、太刀二ふれ矛
二つなり。太刀乃一つて、三原某といふ銘あれども、一つはなし。これは、此二つりの、
昔のますらその、軍をにうちて、そのよろこびよ、此御社よたさめけむおれあるべ
しやいふ。矛のうして、納めぬしゆり、年々宝來の名あり、あつらひさめおれり。
十四日 けふも此處にてものせらる。さてみれば、こゝより、國政といふところ
よ、うつるべかたしを、雨さへいたくぬるよ、山道おれば、宿の朝けのばやう

とくまぬぬ。されば、心のごやうになれるにや、例の暮といふものた、かたはるもあ
れ、又、すけ乃君に物かきてたまたらむと、こふもあれて、さてかきいをら進たれば、
さらぬ人をかきあてて、いとあぬく、らせり。夜にいらして空をれて、下乃うこ
を打とせば、いよ川に川すぢに、白雲ひとすぢなびきこりて、白き大ぬれお
を引へあらむがごとく、又海をやうにも見えて、うけ大月と賜を乃間乃山を、暮
乃とほ乃かに見えて、暮のやうなり。けしきに面白き事いたむうごなり。山道をふ
まぬ人、白きらぬけしきなるべし。水乃音のと、空にまこけて、川を人れ家を見お
ぬたり。されば、

山高みくもけ下ゆく川水乃、音をきけば心をすまゆ「ぞ、かきいたせるに、こは、
いせふるめかくなと人をいひ、我をたうたをへと、哥をたうべにう、づらふへきけ
しきにきこらぬば、おんこれをしてすれと、いひふたたるおとなり。やがて山の霧よ
り月さへはがらしくせし一乃ほりて、なほ見どころをぞまいたる。か、せは回すは

てけて、うけあひなりなど、人へのの、さるをきく、夕げのさげのあひにまう
せて、ねぶりのつせば、そののちはきらき。

十五日　よべのそらよ引きかへて、朝よ煙雨ふりいで、かの月よあさむりれ一
心地す。あさけして、此處をもちて、こたびて、川のことこの山道をかへて行くあり。
さて此にこたびて、時のたくる、處よや、今つ、この花のをかたさるもたね、又桐花、
のまををかたにさきいで、ふへへののまは、畑をさね、めをくくよほてぬはあ。
花のむらさき、山のみさね、いろくくとねくくをうり。借此山城谷村名の數五十九ありは、
東西の長を四里、南北は六里ほどありて、家の數千四百五十、人の數七千八百あまり
なりとか。又、村ぬちに産つるものは、煙草、藍、楮の皮、棕櫚の皮、菜種など、くさく
ありやいふ。されば此山へて、麻植など群がるやと、ことにていへ居をよく、人を
さがしく見ゆ。そもく青勤王家など多うり一所とせば、さる名残よや、何ら
む。大野をいで、信正といふところをすぐるよ、窪陸一といふ人のいへ、道の上よ、

てつかよもてるがたけり。村をさ大野ぬ一のこの家よと、いとふるき物よも、何れ
とて、人よことづけて、持せて来つるを見るに、面四つ、翁堀、二白銅の鏡一つ、こ
鬼大小たね四寸ばかり、裏に七桐空鶴との模様ありて、龜のつまこつきあり。又扇あり、骨
はうせて、紙をはつうにちぎれのとなれど、繪は、金鷄カウニシと鶴ニシとの画は、名残は、う
ら表に何れと、金箔などよさま、いかにを神をひてくふや。繪よよき筆の何と、た
ほゆ。其外古まかまゆのよたほし。さてこと、いろなるもの、何とにうとこつぬる
よ、昔、承久の亂よ、此四國は島へさすらひ下らせ玉ひ一土御門の天皇は、土佐の國
に住みとび玉ひて、これの阿波の國にうつらせ玉ひける御時、國は境は山中よて、俄
よ大雪降りいで、道を埋れよたねければ、すへせやうまくて、只御輿をかきする奉
ね、松たうれ技をせきり下して、焼火を奉り、御供のひとく、さことせにたねて、さ
て一夜あうさせ玉ひたり一幸、此條九代記などよもみゆ。そのかこ此山城谷村に、殘
させ玉ひ一鶴翁といふ人の末にて、まへのあうらよとて、それ後り帝よりこまはり

一を傳へつるなりといふ。けに去る明治四年に頃、いはた幕政の時、その川島
民政所といふへ、差出たたり一紙入といふ書付を見るに、尚くて志のきば、つぎに志
るさむ。

乍恐奉願上覺

一人皇八十三代帝土御門院様去承元年中の頃御位下り給承久三年十月十日都を御
主上佐之國旅多郡畑を申處へ御遷幸之砌私先祖鶴翁と申者供奉仕寛喜年中當國
へ御移江被遊候節山路より懸り雪降風強く上下供奉之人數寒風難受折ら臣下之
者枯木之枝を折火を焚寒風御交被遊無程阿州所久保今の赤谷申處へ着給ひ此處
に暫く御止被遊其節鶴翁老体之事故無據親子御差置に相成又々當郡中西村へ御
遷幸被遊時に爲御形見ト下一置ル品御持之御扇子神鏡一面御作之面四頭只今ニ
所持仕事其後鶴翁ヨリ五代程所久保ニ往居住若狹代中同谷信正名氏神天皇宮之
宮隣ニ居住仕石由緒ヲ以大西覺用源の覺養の事なるべし、即、當時白地
の置に居守せし事阿波誌にも見ゆ公白地御在城

之節御書之通

此書尙わり見
たれと署しぬ

下シ置ル依テ大井庄烏帽子頭ト被仰付棟付御檢地御

帳ニモ片書烏帽子頭ト御坐候事覺用公ヨリ四所大明神御祈禱所ト相成谷中彌豆
共へ下知申付頭役相勤往古々四所大明神祭禮捧幣取行仕未列當立合相勤承候先
祖對馬若狹信濃三代者四所大明神初官ト吉田殿ヨリ御裁許之御朱印頂戴仕未候
所信濃代元録十三年之頃列當長福寺ト出入申立指纏ニ相成其頃纏始末書物等數
多書殘有之候事當御國ニテ御落着ニ相成不申京齊へ御宛御傍之處折悉く信濃京
都ニテ病死仕仰帝之助三才ニ而續而御敷申上ル者も無御坐其儘流レト相成夫々長
福寺祭禮相勤候得共極貧之私共今更御敷申上ル方便モ難調對先祖面目無御坐他
念不得止事心外之至空月日ヲ送ル處然ニ此度御一寄ニ付神佛御取分之御趣意ニ
依而別當相離レ候時ハ先規古例之通四所大明神祭禮捧幣取行ノ幾恐多御願ニハ
御坐候得共私共へ請持ニ被爲仰付被下候得者重々難有仕合ニ奉存候度々神社御
取調ニモ四所明神立合ノ彌豆共神主ト相記差上候得共全神主杯ト申謂無御坐古

米々彌豆糰合主杯ト申而神事之時御弓持鉾持給仕杯仕役亦者拜殿迄ニ御神拜仕
米候事毛頭神主ト申譯無御坐立合之彌豆共之先祖ト一札書物等取置候一札之寫
仕渡一札之事

一私共鳥帽子頭ニ而御坐候得者神祇職被爲仰付次第
万端御下知背申間敷候仍而一札如件

天曆十辰年十一月十一日

大月名 伊織 太夫 判 以下五名署

大久保 主 膳 殿

右之通 令 承 知 候 以 上

山城谷庄屋大野三郎右工門判 外三人與

右之通一札書物取置候殊ニ立合之彌豆共吉田ト之御裁許由不奉受今更内陣へ入
奉幣取行之儀爲相勤候而ト神慮恐多尚亦對先祖面目無御坐立合之彌豆共ハ前懸

之通り從先規之以有美御敷申上候全相違申上間敷何卒御慈愍之上ヲ以御間届ケ
被爲遊古例之通四所明神祭禮奉幣取行之儀恐多御願ニハ御坐候得共私共ハ被爲
仰付被下候得ハ其加至程重々難有仕合ニ可奉存候右之段昨秋八月徳島御役所へ
願書奉差上處早々御請取ニ相成候得共只今ニ御下知無御坐ニ付亦以恐多儀ニ候
得共進紙ヲ以奉願上當秋四所神社祭禮等ニモ列當相離候事故神主ト申ス定無御
坐候間彌豆共立合私事ニ置取杯致シ重移シ神主相勤候儀誠以神慮恐多奉存右之
段御間届被爲遊早々御下知奉覽上候以上

三好郡山城谷鳥帽子頭神主

明治四末年

重熊 菊 印

西 御 出 張 所

右の書物よきたかよき事がらむよりぬ。鏡ををろがむよつけて、そのかみ世はあ
りさきを思ひいでられて、かきく。

をたうみのあてれもいこまひかゞと、くもりさき世よ仰き見る哉。「黒川といふ
ゆすきて、岩戸といふ處よ来て、村役所のみへにてやすらひて、ゆく。こゝに、いと大
きなる桂の木あり。此よりよたかた雲邊寺山見ゆ。

伊豫川の水、けふもとい色あり。こゝに、伊豫の銅山よりあかぐねの水のながせ来るよ
て、さるからに、此川にて、魚もすまはたれぬといふ。國政よつまで、ニシキカワ圓妙坊といふて
らよと、例の事なこたさる。大野より二里あまたなり。宿もやがて此寺よと、かねて
来べき徳島よりの、使ひのよほろ、いたくまぢかねけるが、たぐれて来て、返一もせ
り。又美馬の郷長洋本氏、書記木内氏をゐて、あつねさてやとれぬ。

十六日 朝露ふか、りり一を、やうくさこたぬなうてれて、あつさほとの日和と
なれぬ。此所をもちと、上名といふ野まで行く也。五里ほたり。さて村のは一なる
白川口まで、オシノ、シノ、オシノ、オシノ學務委員等たくられあり。此白川口といふり、白川といふ川は、吉野川
に落ちる處にて、こゝをいひては、西宇村のうぢなり。かくて吉野川の岸を行く、此

道を小歩危といひ、そを先を大歩危といひて、此國の名高き難所なり。今行く道も、
そ一何やまて、ふふもつ一なば、目せたいととくぬかく、あをくさ見ゆるふ
ちれたちいらま一。かやうの所たなくて、中くはけ一きたま一ろ一。川の兩岸は、
やがて山にて、此き一に炭がまをありて、其けふり、川すぢたりに、潮引けるが、あ
たりも大野に見一白雲のさやく、其色こそとこをを思、是もま一け一きをそふるな
り。

河水もさ一の若葉を渡がほは、煙をひやつみさり也けり。「さて、小歩危をすきて、
ゆきくして、西宇の本つ村をもちすぎと、大歩危の口にか、たれぬ。此處に家五六軒
ありて、物あまふ家あり。こゝに家にやすらひて、たぐれて来る人をまちつ。そは
大歩危のあむけの下と、一里ばかりの間、舟よたぬかる、を、今あたふふ三つ舟、
一時にいづべければ、あやにのすへ舟を、かれ、たぐり来む入と、いさをけて
しき大歩危を、かちよりこらむこやを、心ぐるくたそ入はさりけり。かくて、一時

あまねまをよもく来き。かう待ちて来きば、すべな一とて、今といをきこ、五六
丁ゆきて、川ばしよ下りて、二つの舟よびりて、一つは後の人ばあめよ、まひて幾せ
り。さて大歩けの間を、すべて岩山右左よまちならびて、まねき一あうく、川をせ
まく、世よあまひなきけ一まなり。かつ、こぼろを、木々の若葉の、みどりをひゆ
くもあかなれば、ことよ見所たほし。岸の岩の形、高さ、低き、大き、小き、廣き、狭き、
あましき、ゆがめる、ゆるる、あましきけゆたをのこともあり。まことけさま一
よて、いひつゝすへくもあらき。港めまあるところを、岩間よ舟をこせて、打見るよ、
谷の若葉のみどりの間よ、瀧つ瀬の水、いと白くたわくよ見ゆるあま、ことけめつ
ら一。

夏山の青葉のあまもいほとて、いそくもぬふる瀧の白いと。「かくなをめでつ
つ、酒をくみて、あま一むあり、茶をにこひるけするもあり。かゝる間に、たくれ一
人々かの舟にてれひつきて、ひとつになりぬ。たれせかゝり一年、土佐の國よたて
らく

よへくとて、こゝを、舟より下れ一ことあり。それかみて、紅葉のさかりなり一か
いりせけふのれも一ろくもぬ一きよまらむ。

おけやまやみせのまほらぬふかたより、秋のけ一きは物の数ふて。「岩のくほを
こぎたみゆけば、来一方行一もこらぬ屏風の中のやうある所あり、

うなばらた波路は月よ舟や似て、若よりいせ、いとよいるらむ。「さるた、むら一、
貫之の朝臣が、土佐の國よたか入る波路よて、月を見て、そのいに志への仲唐がこと
をねもひあてせられて、波よたいで、波にこそいれ」と、よまきありたことを今それ
もひいで、の、すまひなせも、いほにもむら一にも似るべくや。

こゝに又さるまつ入きて、昔の川を世に四國三郎とかいひて、いと大きく、かの川下
なる岩津といふあしだにては、洪水のとこを、常よた二丈ばかりも、水かさ増す
とかきくあるを、たれしは、やたせけ川は、いとこく狭くたれば、さる洪水乃
時なといかさまにあたなんか。さるはたに上名村乃むら長、舟にてむらひに来て、

これきひとつにあられた。さて瀬を三つばうれば、舟をながりて、岩をつつひ、舟は引
うせて乃ほりつ、ゆきと、舟をながりて、さてまゝ十丁ほまりゆきと、今宵は宿さ
る下名乃、大黒清といふ人の家につきぬ。

十七日 朝八時ばかりの例の事とせめて、ひる頃して、ひるけしてたつ。さて三
好の郡に、此處よて果つれば、郡長武田、書記岸野、宮内うらた人くよとわれ、
又とが一心せり、直よ、美馬の郡祖谷山村なる吾橋といふ所へゆき、そは郡の長と
れとて、すけの君よとてがひて、有瀬といふ土佐の國境なる方よゆけり。下名よりす
こゆきと、昔の川は瀬の瀬といふをこゆて、土日浦といふ所よのほりて、吾橋へ
行く道を左よ見、右よ寺野川を見下して、山は中をらをつたひて、のほりつ下りつゆ
くよ有瀬の民とよ、あやの山のやうのゆきを、つらせよとむらひよまたせよ、す
けの君といふめをなぐさめ、のらせはせせ。さてひるすき四時ばかりゆきと、
國のさかひなどとして、有瀬保といふ人の家よをせり。此家と、新羅三郎の末よと、

舊姓小笠原なりといふ。古き鏡を見れば、山城谷にて見しとて、すこしを
りて、つゝへてせよなり。今宵此處は古き家やまこらなる峯勘一、有瀬央といふ
ひや〜まありて、すけの君よりとせ〜とゆりぬ。けふ作せられある時、行
無此民亦多趣、風流何必訪仙宴、残紅新緑看將飽、踏破白雲入祖山。めでたきみ志
になん。此處いへかき七十ほりなり。土佐の方のちかき村と、長岡郡の岩原なり。
十八日 またきより雨、心もさくふれり。いときてたつに、けふはととさにも
するひや〜、まゝ、童子られふくつきたがひてぬ。まのふ来一道をかへりて、
土日浦は前の方より右ては谷間をのほりて、吾橋なる安樂寺をいふ寺につきぬ。す
なとちとが一心せりのやとなり。此寺にてたこなせぬ。ひる頃とて風いたくふ
きぬれ〜を、夜すこしなきたり。

此寺は古き物は、すまひひかりもさくふは鏡と、一つは観音の形ありて、ひらたく
まろくて、鏡とれたるじき大をけ形ちにて、うや、ふちにつるべき所をぬれど、いたく

す、けて、何の爲の物にう、つたへもなくかむがへも何たらき。其外、佛の本像の小
き、かはらけとせしむるなきあり。又小野寺八郎をいふ人の家に、傳はれるをも、こ
の寺にて見たり。それは、後醍醐天皇よれたまはり一御書付をいふ、巻物にいたる
ニタマキ、標本乃うこの聖乃うたをかけるぬるまかけ物一つ、これに、あれが筆か
るう、とかせとくたもせざり一を、まへのは、小野寺氏の祖先が、忠節をとみせられ
たまひたる御感状を、知行安堵の御書付をいふて、と正平の年頃なれば、うたが
ひもなき南朝の御時のにて、いふとくもふまをいふのなれ。

十九日 朝、郡長とかせうへたぬ。そは何がたのまごころよためされてなり。よ
への雨風名残もなく、空とつうにたれたれたれ。此寺の上の御所の御墓と申す何れ。
御堂ありて、其うらに楓木二本あり。一もとら、ふみじくふとくと、とらへか
となり。あた一本の小きの、てひあがれる根の下に御墓あり。其あり二はは三
坪、石段ありて、とせたてりわあせり。そのうらの一丁四方ばかりを、卯の一ける

よほかせて、あきたる野とあせるり、この御墓をかこみてなれといふ。そとく
あせを、いかなるあど、つづぬるに、むか、後醍醐天皇の御時、うた一は宮、尊
良親王、土佐に國へなごせ玉ひけるを、都に殘させ玉ひと御息所唐歌ひめを、い
あくあてせ玉ひて、素の武文といふ士を、みそらよ都へたつて給ひて、そを、む
かゑさせ給ひて、御息所にて、海路にて、海賊の難にか、らせ給ひて、御供の武文
をさへう一かひ給ひて神佛の恵とよよりと、あやふき所をものがせさせ玉ひて、
讃岐國、引田の浦よつうせ玉ひて、夫とた土佐の國へと、此山道へて入らせ玉へた。
とかるよをたし、只ならぬ御身よとて一ければ、此所とた三四里とへある中
つ峯にか、らせ給ひけるころ、ふと御産のけつうせ玉ひて、いかで人家のある所ま
で、事なくいそむと、神よいはらせ玉ひてその、何とを今祈誓が久保といふとかや。
それとたふもとよ下らせ給ひて祖谷川のへよと御子あれまぬ。こ、をウブシキ
ノナルといふとぞ。それ心て、産敷の平といふことなれといふ。かく何さまくう

ませあまひけるを、なほ幸なきて、その若宮の、あたよ、神さね給ひし御事なれ。
さてなげまかなうて、はてはるべきならねば、そは處よろむに給ひて、あみなと
まもよ、かたみの御品を、残させ玉ひて、さてやうくあざりゆきて、土佐の國なる
杖立のあむけまをゆきまゝ、を、かた宮よし、其かみしてや、都よりへらせ給ひぬをい
ふことをまうせ給ひて、かみかくくへらせ給ふまで、御杖を立て給ひしは、今
よその峯を杖立峠といふとや。それとりまゝ、もと乃道をうへらせ給ひて、此吾
橋なる左手の岩やといふにきたまひし時、かた産後の御悩みいとれもらせ給ひて、
かた雲、遂よ、むなしくしてさせ給ひたれしを、後よ安樂寺の僧の、その御骨をひ
ろひまつりて、今の御墓よは葬りまつるなりといふ。是しこの安樂寺の書きもの
よあるを、又村人のいひ傳へての、大とそなるが、大平記に、しこの御息所か、もと
御匣殿と申て、上にもあけつるをせく、土佐よは武文して、むくへさせられたるに
とて、都を立ちせ給ひて、船出たまひむせせる夜、俄に松浦五郎といふ海賊にあは

りとりとせ給ひて、其お神にいそあるに、毒いたくあれいで、臨門のあたりに三
四日もあるといひしなり。かくて後、小舟に舟子一人をへて、船てられ給ひけるを、武島
まといふ島（今和歌山県）へ流れつかせ給ひて、登こに、まゝとく其年数くらゝ給ひぬ。
次は年寄、御神浴の後、御息所の、其所にすすらひたれしは、すすたて給ひて、
直よかへ奉り給ふが、其後、世の中又みたれよみたせて、宮よか、遂よ北は國にて
御自害あそばさせ給ひて、御息所、何うてなげまを給ひて、さらむ、こせも、程なくな
くならせ給へりしを、記してあり
〔増補には、これにもことありて、親王の土佐に流され給
此ところには、あげのらはせ。〕上の傳へと、いたくことなれど、たのせはあふよ、昔は
のせ僧とも、何のあや、くれの後を、うまうあばかりまうけて、世はあさむく
例なきよ、もあらねど、今御息所の通らせ給ひしとまゝ、道のほいであを考へて
れば、これとて、なげに種なきことよあらざるべく、もして、當時かの太平記
の作者は、中へよ、あやまらありけんかまざるべからせ。さして、其文の中に

にはよりつれ。土御門天皇を、ひを流しよはせまつせし。寄居村中、むけにちりばみ
て、またまけなり。松のまへ、何のまて辨の花はあら、唐のりたんやあらしふそ
の葉をば、かけとたしたる。ををめまつれのぞの、何りさりら入らうにぬや
けなり。か、れば、とく清見よと、すけれ君の、相掌、まへ、村をさるぞにあふせられ
して松、うへもと、ありがたかりけれ。

此處坂よりして、古宮といふにまゐるに、西をまみの方へま、山道坂つゝあひて、のほ
ること二十丁ほどまゐりて、若山何り、左手山といふ山よ、こまなん、うは松宮の、なて
させ登ひ一御石となたてしふなる。鳥居あり、寄居あり、拜殿何れ、こまよけたき
よくこ、まへの宮よたて、まよけなれ。籠らせ登ひ一御跡といふ坂みるよ、岩をてし
し入、五五六番成りりのひうさのこ、入口開きて、まづへを入れちて、人の住まふへ
くおめらきまむ、まよよ、何れ神名をたぬる石碑もなり。かの安樂寺よ何り一
地蔵の像、まへ御首をぬて、此處より掘出たるものなりとまふ。こゝへ松宮の、の、

かされば、人の家に入らせられたるに、かゝるほらには、果てさせたはひりけ
むかを、入らへる一とて、たへはかたれ觀音をさる。こゝを聖^クのたひぬたむすた
たむらふむせむせむとて、く、まをりせ登ひたむらふ道のなすむをたぬ入むすた
にすつゝかると、おれはらき。又洞にこらせ登ひたむらふこせむらむら、こゝへ一
うまを登り御うぬぬ、こゝを御位をりたむらむひつ、墨をたぬ衣よ、まむ世の
ひやをさるをせ登ひ三御筆のこゝを、神の道のをかたなり一代々のもめはをたぬ、た
ゆひあつすむせは。まぶらやある一むんせむぬぬぬらう一。こゝも角にも、御筆ののこ
きよ一むらぬば、うゝるこせむぬぬ、まきりまむせむぬぬらぬが、中へ一よほたれ
かく、まら一のし、たは、まぬぬぬぬ、こゝをさる入む。ひが、かきはつむひたる、神社の
總代とらむせむにかへり、まむむなる有瀬村の、御野やらむ處に、御食は若屋やら
ぶらむな、こゝを御野のむららせ登ひ三處に、こゝに、藤一流幾一帯入れ一を、其
處の、藤の流せむらむのこはつ親なるどの、おれを得て、衆よはぬ入たれを、佐

平のやまのりて、お世を、何往與一やふ入、解入貫目よて賣りてお世、こゝに入
り、こゝと變祭の頃を述べた。此の法をいふ人は家は、あすけ夜、お世入はたは
なれば、お世ひらぬひることもあらぬかきへ、うへなる。其外、此處のをこゝは
りといぬ源太郎田、京女郎の墓など、いひしもの、藤原のちかみはるのあせ、お世け、こ
た〜一け世は、まじりてせせせ。

こゝを過かりて、お世太尾といふ時をあらて、重末をいふ處へゆくに、藤原花、今を
さう述べたお世をわ〜。山櫻のちりて、又〜うらぬを、春は名残とたも入ば、見
つら〜。みぬに登れば、祖谷山〜とふかくほを見ぬ。重末乃入解け神社、か
あはらなる、新祭の學校にやすらひて、ひらおせり。此神社は、入解け神社をさ
て、今宮居、新祭のまかななり。昔此社は藤原をいふ城見るに、そ〜安徳天皇の、
御骨をいつきまはれるなり。お世かみたんの浦の戦ふ、平家ちり〜ようちやぶら
れて、まじりてをさる〜もの、藤原入るもの、よけまはるもの、お世の、あやふ〜

またたそろ〜中流、いかに〜てけむ、門脇寄相に女男國盛、天皇をすくひいで奉り
て、さて此祖谷の興にこそり〜に、衆技渡といふ處にて崩り給ひて、其處にてふり
まつりけるを、喜多源内をいふ人は祖先の、此處に移〜まつれるなれといふ。此事
のほおをいつは述べ、今いはせ。天皇乃御具足といふを見るに、何にせよ古びたる
そのにて、魁乃はち、そで、たの〜一つ、前の垂なを〜され〜に〜ばみたせ
お、い〜と〜か〜り〜ものを見ぬ。さて、すけ乃君、

さらぬたにうるほひがちの旅衣、いや山ふかき五月雨のそらとか、まこら〜かは、
五月雨のふるもいとせき旅衣、いや山ふかくとけそまよける。「此處をあらて、
祖谷川を右に見下〜て、こな〜山道をすぎて、戸の谷をいふ所にて、それ
は、川端に下り、祖谷川の橋を向ひに渡る。此橋は、紫橋といひて、まこと紫をあ
み〜きて、こ〜せる森がき橋也。川の兩岸、いとはありくけて〜さが、さ〜出あるう
へにこ〜せるなり。岩の水にさらされて清らうなるに、き〜へて、草木たひさけり

て、かた相川橋よりゆげしきよと、人々の、お、一なるを理りたまはらせ。こゝりて、道よりすこゝ乃ほれば、かの若宮の御誕生所をいふ所あり。小き祠をすままつりて、こゝをな、うぶりき乃なるとはいぬある、その事をゆて、まへよとるせるを、今此所よ来て、其むりて扱れぬ、そのかみ御息所乃御心也、いふさまよれたたまはけむ。打日とす都乃空坂向くおせいで、泰山とろく、天下るひさの國へと旅立せ、あはれ風、ふぶせき決せやも、いせはせ神はき物たまぬ、ひと入に、宮のあひまつらとてあは、けす。さる坂、時をあらむよ、玉はこ乃道のゆてよて、御子にまは、くさくさのの調度をもたれと、のはせたまはせ、まゝと御力にゆなるべきいやから扱や。かくと、い心た乃には、いふで宮にひはつりなばい、や一き入間此種ならぬ玉の御顔を、ふこりよろこばむなと、かにかくと、おをひまうるをさせたはひよけん御事も、あたこせにて、祖谷の谷川いやを、あくも、其御子を入よ、はかたま水の、いせはらうせあまひ、そのまへ、宮よ、あひを、あつらせ、かゝるをよ、尚

御身をも登へて、空くしてせ給ひにたれこせと。かた一きなと、申すゆなりくたろなり。

あふことき、いすうのこゝか紫橋や、たぬうらと乃形身なるらせ。「さて此處より、川を右に見てゆけば、一字といふ處よと、むら中川にのぞける間に、平崎若宮神社と申すあり。かの若宮をまつれる、大きな御社あり。此拜殿にやすらひて、御賢物を拜むに、はへにけるせる形身は、肌守と、鏡なごなり。肌守よりて、鏡のこやく、銅にてやあらせ、又其中のこ、観音の像にてやあらせ、まこせに名残ばかりが有り。ふちに、紐をうくる處あり。まゝとあ一一寸五六分あり。おれ扱みて、思ひあこれと、かの安樂寺にて見つる、圓さうたの物也、これよりいさ、か大きかりかた、やがと守なりこせうながひな、まこまへの肌守を、たまひき大さの鏡あり。兼よてふは模様ありて、かゝらに、村田藤原定次とありてあり。こはふあつなむ、若宮にそへさせ給ひ、形身乃、残れるありといふ。外に、今ほで處くにて見

一かしの鏡大小十二ありて、其ひとつは、うらよ天下一和泉作といふ銘あり
き。此かのみをものつて入るとは、今知事がある。さると、古き書をもつては、傳
はせる家の、してよく焼けたてしやきに、なせたてしゆをなやといふ。後に、すけの君、
さる鏡の銘し、近き世の記にはあらぬか、朝へみまほすと、いはせられたたけれ
ば、入にきといひ、書といきをかいつねたれとも、つやく一からき。志一あらき入い
かを考へてと。かくけふは、處々よて、古く又いせめづら一き處も物を見つ、来一
かば、ひるびき五時ばりたに、此處に藤川舎といふひとついで、入につきて、やとせだ。
主人乃子、數馬といふ人、學務委員にて、げふ道引させられき。今宵夢をめて、時計
乃からくりの、めぐる音をま、あやまりて、幽靈といふさ世をといひあひて、又
ねえだたるに、あやまきと、湯淺のまにに河入り。氏のいまた世もあり一かを乃こ
とを、何くれと語らひて、さて後の事をもよこつらせせするよ、ふと人かたりて、
やがてさむせば、夢をたけり。氏は、此縣乃學務乃つらを乃ををれて、なや一を、

去年の十一月、むなしく身まうられたりき。帶よ、氏が世にあらせま一うばををた
まひ一うらに、かくは夢よも見ら一もたか、

よみちまをたもふこ、うたかといひ書、あま入の來て夢よあひつる。「又すけ
れ君のうたに、かど、きすなくやたひねの夢をめて、つれなくを見る山乃は乃月、
こと、今宵のなやたほ、を、よみいせらせてあてれあり。このとあれた、夜、あはを
といふも乃を、き、心安けあり。

廿日 やををちて、祖谷川よそひこのほりゆけば、龍河り、ひまうらき。きけふ、
川のむかひにて見一龍なるを、其時より、今て水入たて、をかきよな一。此龍、名な
一ときけば、すけ乃君、遠見の龍といふ名なれたせらしり。をちうあより見たが、
よかり一ゆゑなるべとど、たのまがね一はうりぞ。さて二十丁かをゆれば、音よ
まき善徳の曼橋なり。祖谷川にこせざるなり。白くちかつらにて、とや木をほみて
かたしり。幅五尺ばかり、下すまで、水いともかき音一を見ゆ。手すたあれたぞ、

これゆ、かつらをあらへりてとたせり。さて長を三十三間、高さ三十三ひろありといふ。よなむこあた乃き一にり、何また乃大木に引きゆひて、いせ手づつげなせむ。何となく何やふくたほらて、初めて見たるゆはて、足もとぬるふ、ぬるへは橋ゆれて、尚とありがも一。か、世は、か給て事とるも、いたく心一とぞとたる。さらぬは、いみじくあや一けあや。先にとされるて、此さまを見てとらひあへるが、くや一かゝるべし世は、いかにせむ。さて橋乃中らとり見とせば、川のながれ、き一は木草とぞ、いへて見られたり。

やまは木をはひ一かつらの橋なれや、人も命をかきてとたれる。「とあるれば開定といふ處なり。道より少一左に入せば、岩が給よりつゝあひ暮つる瀧の瀬あり。琵琶乃瀧とぞいひける。けに上り細く、下とるうくひろくなりて、半ひぎの處にて、すこ一をれさがりあるまど、さながらといふ一。まことと見づら一を瀧にあそ。

平とふ臣乃木の子住と山の、いや昔高一ひとの瀧は瀬。「高さ三十三間ばかり、下

のは二間ほどあり。此瀧を見て、上の方へ是ぐり登る幸五丁斗よと堂あり。こゝよやすらひて、にぎりいひ、食せや。此處よむかへられある今瀧といふ處は、堀川要といふ人、田き細見せぬ。天國の作りやぞ。身の丈ヶ壹尺五寸斗、惣あけ壹尺八寸かきあや。柄をらてき、帯にいふ青貝せりよて、かいらは、銅よやをびたや。鐘は鉄にて、をやと横すちを入せある木なや。作りさほいとふる見よ一。すけの君は、世よ行者といひ一者さとの、さき、かゝなりとほ城を造あり。さて此堀川をいふ人の家は、昔、京の堀川御所の侍あり一を、此所にこそりすめるなやと、いひつたへてあれども、書物にぞとて、そやく火の災にあひて、うせしり一とぞ。こせも、平家の時の落人さぞにてありとぞとる。さて又こゝよはとほと乃ほはて、事にいありたるよ、まごころとり御使乃よほろ来あひあり。此坂は、戸越たむけといふやぞ。さて川乃向ひよ、高野、和田、小島などいふ所を見て、今井釣井などいふ所をすぎて、元井をいふ所乃辻堂にてひるけせり。こゝにて、ふとをかきと、とほろにた一とるをせり。か

くつち、城あちて、ゆくぢに、朝日額といふ所に、またかづらていなり。まへ乃よ
はは、すこいふさ。こ、は、い、や川と、あ佐といふかたより来る川に、わちあへる
所なり。いまて、川をこらで、右に方へと入りて、あ佐の川をこあるに、これは
こらづらていなり。こらて、十丁のまりゆきて、今宵の宿ふる阿佐與一といふ人
乃家につあり。い入居いと大きなり。

此家て、祖谷にて、い、いと名高き家にて、前にいさ、かたるせる平氏、門脇宰相の
少男、國盛の末ふ。今此家乃系圖といふを見るに、元暦二年極月、此
山よ入れて、大枝といふ所乃岩屋に籠れ。是を今、平家岩屋といふ。さて其年、
こらて、翌年の初め、その所乃名主坂討ち平らけて、其所に住居を定ふるを、其後
此阿佐の方へ引うたれて、國盛も此所よて定命を終れ、定福寺といひひー寺に
せりといふ。これも今、其跡に。かくて後、紀伊守といひひー代、天文の頃、阿波の
守細川持隆と、三好義隆守之長との戦に、其紀伊守は、三好方に忠を盡し、あは
かば

此山のうちの領主をなげけるに、津須賀氏の代となりては、卿士といふを乃にあ
て、高世石かを賜れとぞ。うくて今に、其家すぢ絶れ。かば祖先國盛よ十
九代不つといふ。さて家の寶物に、これも昔よせく平家乃旗にて、大きなる
は、たけ壹丈、幅四尺、上よ八幡大菩薩の文字あり。弘法大師の筆なりといひ、い
かな。書しいかにも見事なり。地を額にて、赤と紫と織合せ、上中下を赤、其間
れのくして紫なりを、年をふるま、に、赤色は茶、紫は黒色といはせりといふ。處
々よふれたるを、こつらひて、軸をなしてあり。さて小き方、丈八尺、幅壹尺八
寸、これも軸ものよて、今は茶色を、もとて赤かといふ。是にも、上の方よ
八幡大菩薩、其左に春日大明神、其右に高麗大明神の文字あり。嵯峨天皇乃御筆な
りといふ。下に蝶二ツ、むらひてあり。其外、系圖二卷、三好之連といふ人との書
狀一卷あり。又備前助義と物にて、建武乃頃の刀一こら。其傳へて、かば紀伊
守が持たりといふ。さて系圖の初め、源平盛衰記など、こをあらせ。され

と、安徳天皇の此山に入らせ給ひ一とつひふこととし、こせにゆなぐて、あつひつ
へのとなれば。今たそふよ、國盛此山に籠れて、さすが守かゝをすてがしつて、
天皇の御靈あそや、いひまつりけんが、てじ見よと。そ進城やうくあやまり傳
へめてきて、うくはいふなるべし。此家のまゝろは高さ處に、觀音の堂あり。やがて
定福寺といひ一寺乃名残にて、鰐口と、かき燈籠あり。とよぐちて、應永の頃の作
り。定福寺乃石をば、あふこのうへかりといふ。此堂のまゝろ、にいみじく大きな
木の木あり。ほたり九間堂尺あり。まことよふるくはづら一き木なり。

廿一日 たらがけに、國盛乃墓といふへほる進り。道よりすこ一入りて、草木生
ひまけたある中にあり。大きな老松、二本は間に二處、あけむたてあり。國盛妻夫
乃かたといふ。松もは松をほつせいふとぞ。さてまはふ入り来一道坂かへたて、中
程よは右手山はらを上たも下たも一て、養生上まゝふ處坂すきて、林といぬ處
よつた。何佐よは一里あまなり。此處に、何佐熊寺といふ入た家を宿とて、こ

の家にて何のこたれたことなれり。はやくはて、あつてなまのみまひきよてたて、
川に下たて、網敷をちて、魚をせり。鯨イヌをいふう坂にて、夕けのさかなに
せり。此家よ古きものあり、長さ九尺斗也。あれか、むらゝ、ある人、かの平家松若屋に
ありてあけき一あるを見付けて、此家よゆづり一物なりとぞ。さるは、此家を何佐
与一乃列れよと、平家の末ありければなるべし。こゝにまゝ、たもひあたせるて、吾
橋の古宮にてまゝ、と語にて、何佐与一の家の傳へをまゝ、ふかく考ふるよ、かた旗
た、あらぬ入とりうひまけて、世説いつはりあやましくもつとをたはらき。今の主人
あつての、ふかき山よ住むにぞ似たかき、何となくゆかき人柄よと、けに平家の末
といひむにはぢさるふりとも見てまゝなるべし。されば、かたはまゝ一は、たをじく何佐
といひ氏も一はなれば、此家のまのこをまゝも、あやまは傳へ一う、さらきば、あつ
たをまゝとまゝし入る、まゝいひふら一たりあつて一らき、まかゝ世の中には己れを
いつてるあつた、人をまゝこつるありて、まゝ一たるあつて一もあつてまゝ、あまうにまゝた

此ところへ入ると、たぐひのうらやまする所あり。ことばをたぐひにたぐひて、
とて、こひ詰りたぐひのうらやまのせき、かゝりて、たぐひ入て、其心もかたぐ
つてはたぐひのうらやまのうらやま、幾れり。すへて、かやうの處でたぐひ、ぬく末
あはれもたぐひもたぐひのうらやま、かゝりてたぐひ。

此處坂まかたぐひ、山坂見れば、粟波渡の橋あり。傳へたぐひのうらやま、くたぐひは
ればたぐひのうらやま。暮合とたぐひのうらやま、書けりたぐひのうらやま、尚ほたぐひのうらやま、此
處にて物ひたぐひのうらやまのうらやま、早つたぐひのうらやまのうらやま、未だしり。それら、足袋のうら
かりて、くたぐひのうらやま。此處のうらやまのうらやま、一里がうらやまの間は針立岩、明丈の
手橋、粟波石、たぐひのうらやま、これはたぐひ、こゝたぐひればたぐひのうらやま。實にたぐひ、ひるはたぐひの
とある處のうらやまより一歩、たぐひのうらやまは見えぬれば、川は流れて下りて、木のう
らてをたぐひたり。中へ地よたぐひのうらやま。此處に木一筋入て、太田のうらやまのうらやまかたぐひを
くたぐひ、道行のうらやまも見たり。是れもたぐひのうらやま、川のせきはたぐひのうらやまのうらやま、是れ

十六間、高サ廿八間、兩岸に木をまきひたぐひて、けりたぐひのうらやま。此橋坂をたぐひ
て、左の方の細道坂すこたぐひれば、草木のうらやまのうらやまのうらやま、書ゆくらたぐひのうらやま
處より谷川の、祖谷川にたぐひつるあり。西山小谷川をいふ。此川よるせり一本はたぐひ
上と下を見るに、是れ岩けせまたぐひのうらやま、水二たぐひのうらやま、一つは瀬のうらやまをく
たぐひ。一つは岩の大きなる瀬のうらやまの瀬をたぐひて、まへの水をたぐひてたぐひて、たぐひ
まなくけりたぐひ、ぬきたぐひたぐひたぐひ、うらやま大川まにたぐひ、すべて岩間たぐひつるなり。
書けて、又川坂向ひよたぐひて、ぬきたぐひ、山のうらやまへひらたぐひるやまよて、行
へひろく見ゆ。ゆく道の谷川に、ぬきたぐひのうらやまあり。まやすつたぐひのうらやまのうらやま、日々
たぐひたぐひ、取れりてか、さばかたぐひのうらやま、雲はたぐひたぐひ。そそく祖谷山よりて
たぐひのうらやま、山の色、木は青、たぐひたぐひたぐひたぐひたぐひ、またたぐひて藤花のうらやまひ、
茶花の花をり、谷にまへつる瀬、空にまき時鳥、ふるものたぐひのうらやま、みづたぐひのうらやま
にたぐひる入たぐひのうらやまかゝり。書すき二時たぐひに、管生たぐひのうらやまのうらやま、管生塔九

郎といふ人の家にやとれた。林とて四里ふとせ。此家も白家にて、うま入るる、今尚
てにたまはるに、いとゆか。さて此い色の旗、また古き書さゆつを見るに、はし
て、丈け九尺、はつ三尺ばかり細地にて、おれを、ハ幡大菩薩の文字を、下に三藍
ひの敷あり。家のはる也とらん入る、何時は頃との傳りのとや、とつらき。書物と、
正平年中南朝とのにかつらぎ、たまはり一處領安堵の御書付なり。さてあすの、
強てひひとて来た、此國の二つある高は山ある鶴の御山よのはるへはせせ、何くれ
そのいそぎをさへて、さてまへ、あるとらぬて、魚とりよめはて、川の入の、更橋は
そとなる岩の上の、さへしては、火をうつせをさへて、せりける魚を
きて、酒のりさへてたのいひ、岩のいせを、岸のさへつ、このちかぬるが、
とせりある水にたれるも、たへ無故をへしり。またせせあをさへり。

祖谷山乃ふか川入る岩のまへに、酒のへつ、魚もとりた。

廿三日 夜、二時ごろたつらぎて、空の模様を見するに、とていふ。尚ふと

見るよ、星の見ゆる處もあせ、くもりたり。入にせ入は、あせといふとあり。やにゆ
角にも、身の装ひをなして、さば一まをせ、支度する程よ、ますくくらくあり
て、星も見らるやぬ。夜あけは、ひまをひやさんせて、岩のまへにたぬす
に、いよ一雨をほふやいぬ。さへて、ひふの山さうをた、わらなとせ、ぬぬ。
夜あけて見るに、雨はせぬらぬ、空はあせなれば、さへていそがるれば、たゆひ
い、こと道をしつ。とて一ああら。管生は、来一方のり入は、祖谷の奥に
て、又、山の名に一たふ深かき、一宇山乃方より、入口にて、處を此山乃中乃
いと開ける處と見らあり。さて、このふあそび一川へは橋敷とぬて、右へゆか
らに左の方へ澤べたつたひのはる。これさん一宇の方へこゆる山、島嶺の道にてあ
ねける。かく登りて、山をこらつ、谷をこらつ、細道坂のほりして、岩にたぬ。
管生との二里向をたせ。やすらひゆせをせは、山路をふみなせたれば
也。此事は、祖谷を一宇乃さうひなだ。祖谷に入るとり、一トあとの日をうつ

ありあけ。さて此山は、西祖谷山村名の数十九ありの方は、東西四里、南北六里、また人乃
 うぎて四千三百ほどよ、八百ばかりの家数あり。東祖谷山村名の数二十八ありは、方丈長廿八
 里、幅五里あり、家数八百、人の數四千ほどにして、彼是は産物にて、茶、煙草、藍、
 楮の皮、菜種、楮の内を多くとるなり。所は風、なやてひれをほ、いりけを質素よ
 て、けに海世はなせし深山にはありけり。けさよりあるを雨にひひを、やうくして
 進きたりぬ。嶺の山はとは、尚雨雲は間に見ゆ。これを見て、残りを一さは、いさゝか
 うすらぎぬ。峯より一里ふと下れば、一字奥山村名の数二十ありの名谷といふ所よ、家もりく
 よあけ。下れいせはしりて、ははれをりて流るぬ。若ふを山谷一けある辻堂よ
 て、ひるけせり。此所は一里はあり下りて、山坂めくけて、中野といふ所につきて、
 谷幸次郎といふひとの家にかゝりぬ。

廿四日 宿をたちて、東の山を川につきて下りて、橋を川の左よとあれば、
 一字口山村なり。あつらふすき一ぬれば、橋をたてといふ坂あり。高き岩が森のけ

へは道をつけて、いとゆるあ。かた祖谷の山路へらふれば、物の數
 ありあけ。こゝに又蛇まき石といふ石あけ。こゝと大をあら。石にて、其下洞穴あり、
 中の圓を岩、しせをかたり、是を蛇の巻まき石といふにや。それのまちなる物一
 り入、西の山にの、これかひ鐘乳石まき石のなりまき入り。れもありぬ。こゝに
 口山のしり茶畑は、物ひちか家ありあり、やをへり一ければ、やうく一里めきた
 る心地をする。ひるまへ十時許よ、一字各まき石所の、南長嶺といふ入は、へりつ
 きてやせせり。ひる道は、二里はありせ。此處は寺にて、例の事たこまてして、晝
 すぎ二時ばかりはて、昔にまき土釜トクベをいふを見にまきす。此處より二十
 百あり、川下にあり。やせのあるまきつれたまきぬに、遠方より水音の高きまき
 て、近くなるまき、いよ一まきまき。これまき土釜まきまきちなりける。一字川
 の兩岸、岩ふらと高きか、やうく一狭くまきまき。此所にて、龍にもまきつまき
 を、水はたふきに、川底の、岩よせかるれば、まき、高きまきのまきつるまきまき

る水の、白煙あて、巻きか入れる、すさまじきといはむゆたをろし。其水はつぎ
 あたるさまは若、ふせ入れて、おのつから釜のなまよ見れて、ひろき由深きもたる入
 からき、こそ一の釜といぬ、此水まうつまかけて流きの岩間にせうまはりてまつ
 ぼくを、二の釜といひ、其水若よ穴ぼくがちて、三の釜にひる也、此穴を満月といふ。
 三の釜にけふもまをけて、水まづうよながる。さてお世を見るに、岸のうへの樹に
 をけて、おどけまゝあく見ゆき。若れをなにはひひづるよ、目くるまを、志ひて見
 れきもいまたき。一乃かぼの上の此方せ、向ひとといと狭くて、まびとこるべきな
 れば、時をうてし、水を渡すことあら、うくして見れば、一の釜にまたく見ゆきいふ。
 なる神のまろく音坂一宇川、ふかき岩は若れまよお世まは。「いひはくけいへくを
 何らき、ひーまよまといとせよりし、すさまじうたれなかり。こゝを見て、鳴龍入ぬ。
 川坂へたて、毘沙門音といふ山を坂右に見て、ぬくまを五六丁にて鳴龍あり、
 こまは川の右手は谷川にて、水はあからぬき、はるうに上坂見るに、二のぼくよ若

ちて、凡二もまたたちてひとつになれて、まも二たきたちつるよ、下のかゝるまふ
 せー。若れけーま、水のをせれおろくままきて、道のかたをらの、山高き處にむ
 たらをまけて、ままなるまてひとくめでたをす。
 へんたへんまをいつら一まうまをうせても、すまはひやつよなるしほのれと。ある
 おまといふ名を、おまよこやある身にいたまをたておま。
 なるまもまを念入の若れまを一すまよ、つらぬく音の激まかす。「まがまをひさまい、
 あれをまかーとまをけくつらぬきたまい、あへるまに、日くれり、たぬればま
 まつれて、まとの遺城まをにか入たぬ。
 夕けのさかゆりに、ま入うなる二人いたまをまてます。入のうーといふ旅に、久ー
 く日坂くらま、せらぬたに、山路のをば道をのみ物することゆゑ、何事か心坂なく
 らまをいすまをまへんて、あはらまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをい
 らまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをいすまをい

みればひくして、知らひあへるが中よ、かのれとまなるが、橋を籠よら進てかひつ
る波見て来一人、其事をいひいで、此とありの給こには、羽やある、飛びやするさ
るべされいへば、そのうある、ゆかたがねと、知らひて、白こたへぬを、進下のか
しとね、一トきと舞ゆる、けををりね、「なごかあうらき、けふは道よと、ねこそとり
せふ所てべり一ならきや」といひはなとば、ひとく、まありをくして、知らひ
まよめきたり。流ぶての中、玉ねやまなるかりければ、かく口なむ。此家の事、は
あ、まをにまるとる小野寺氏也、物も、大刀五腰、いつせもふるき遺物あり。矢乃
根大小そこはく、弓の流る一すぢ、蜂須賀達庵公の制札三枚、外に書物とを数多あは
ま。

廿五日 谷を渡たちて、川渡とて、剪字とせむいふ峠をこらて、半平山村なる
北殿といぬ所にて晝けして、長尾といぬ處渡すぐるに、ドウクノ瀧をいふあり。あ
れは、おつれとせは、半平山に奉一時に、道にまてひ入りて、ふや見一あやあり。今

は、さびかたはつら一うらなむ、こゝまは一やすらひて、なて半平山にぬまうせ
て、諸方陽一郡をらふひまのく入よをのぬ。ひふの道は、五里向きの向り。半平川
の川べとやをまその登り、半道ははたし、ふとけと一して、ま入のこむけの上下
二里あまのよまをりてつかれぬ。

廿六日 例に事たこなきとせむいふまねぬ。

廿七日 くもたせとせむ、朝のまのみにてはせぬ。谷ををらひて、一里かを交、川
渡傳ひ下せば、谷川とりたつる瀧あり。紅葉はあせむいふ。さび一やすらひて見よ
に、青葉のひまのりつうへとぬ。

名に一たふ紅葉のたまも夏なれば、青葉のかげよ音をこそまけ。「又一里かを
下れば、口山村なる宮内をいふ處あり。此處に白人の神社とを設すあり。山中にて
大きなる神社にて、二社あり。本つ社より、天照大神はじめはつたて、すへて五柱
ま一はせり。此神社は古きゆめをよを見はへるよ、まを三ツ、一ツにた、象牙に

せつ波のしるべかきやまのり。すけの君、こゝろをよきとらふに用ひし
りならんせふはれき。又徑六七寸許は西面の古鏡のり。雲のそびきて、青みあり。是
て此神社の、右手の岡なる神明山といふ山より、掘りこみせられたり。さて其神
明山へのほりて見るに、上へ廣く、前川にのぞみ、あたれうけておれくる岡にて、
中らふ、石をつとまはきて築とせせる岡あり。門三つありて、中に入せば、祠、か
とせむの向ひにすまはせり。かこらぬ、そまの家老稲田氏に敷をか、れたた。
そまは、此とありは、元日、稲田氏の領地よて、白人の神社と、此處を、氏乃をばら
祭られしやと入り。神は何神よをますらむ、知る人ぞなく、陸たへをたるとい
へ、いみじく神をひあや。そまは、そまの部乃神のあと、いふもあれき、せむら
けがた。うねてまきしるにせ入て、村敷を西岡氏らにせらひにて、此處より川
舟よのたて下る。心せ、ある者に、船をまかせ、あゆませむと、酒をく、ひる
けをたて、下るに、せむらひは、せむらひの、さびかたならぬを、上瀬、下瀬をいふ瀬

を下るときか、舟、矢を射るむがこせくはやく、川流に來れば、舟はながる、よま
かせをたて、向そひのくに、せらぬたにけふて、山路は、馬野より入りけ
ば、ひとく河とまぐいとせえた。かゝなれば、白地より川野、かたせむた
川口、又名高き大はけ山の下の、山路に入れし、舟と燈のほたきを、はほつ
るよまほし卒をたて下れば、山を舟よのりて入れたる、さるにておらに
ぬか、いひあへるもこまのりあり。

面白き山路の旅や谷川に、舟うけていれさふさうていつ「なまふまよ穴吹村
よつきて、舟旅のたかき、吉野川にたて、猪尻村は河岸よつきて、馬野なる吉田
院夫をふ人の、馬野のりやせり。いへうつくへ、そまを馬野のりなり。此
處のあらゆるつかさひや、そま、米入のり、山路のこととせかいらひて、せむら
ひせむの、一ふたり。

廿八日 馬野小學校の、新築開校の式あり。夕うあてり主人の掛けにせむら、寺の

川舟をうりへて、夜中まであそべり。

廿九日 けふは例の事おこさる。

卅日 けふは夕か、こゝに裁判所の長、藤川ぬゝ、任に外へ物すとて、そのたぐりの真あり、はるせり。

卅一日 けふは例のみこさ、全く終入させられぬ。郡の長、岸本氏よまねかれ、そまの脇といひ一城あとなる尤如事をふみて、をりゆりせせ。あされ、すけは君の心を、一く、あ一引れ山縣おさむを授けぬ。白雲のたちあの花さふは、ならぬ職がぬせを、中へに好ませられて、物さむつる其一り入にうまきいが入るひとく、何うはうよとらむ。昔まどの、いさほひに、とますれば、すゝまことさすまがかりける故、神の恵みか、いせぬひとさ、足はしむまはせらせ、雨風たにをはるこまきく、は、とま、たたく、こゝに事終入ぬとれぬは、いとこらうせく、たのづから袖ぬらぬ。

六月一日

朝来にて河波の郡宮が島を下げ、そせり、藤太夫須賀ある大島半作をいぬ人、家よはせてをせり、こゝに、今、速回にたせられたるに、ひ申せせ。けふは、宮の島川原より、けし細ららむとて、おせを見たり、其にさすなる人、八百あまやつひて、戦ひあ、うするよ、これを見むとて、はる人、ささぬひろき河原に、山をたせり。をせ主人も、そのせよあけある入にて、後教をも何くれせせらせ、又あつてせせぬ。

二日 川島にて書をたて、かへぬ。空くも、雨すこふや、家よはく頭せぬ。やせをいふと、二十日あまり七日せらふいとすくなからぬ日敷のふせも、山川のたうぬけ、さく、のあうぬは、さうなぬとて、すすめつら、うまき、いさほひに、とますれば、すゝまことさすまがかりける故、神の恵みか、いせぬひとさ、足はしむまはせらせ、雨風たにをはるこまきく、は、とま、たたく、こゝに事終入ぬとれぬは、いとこらうせく、たのづから袖ぬらぬ。

このこと、ささぬひろき河原に、山をたせり。をせ主人も、そのせよあけある入にて、後教をも何くれせせらせ、又あつてせせぬ。

の六月。

不老不死の主人 壯武磨呂

明治十八年三月六日版權免許
同年七月廿五日出版

定價三拾五錢

著者

長野縣平民

山田邦

阿波國名東郡德島富田浦町
百三拾五番地寄留

出版人

德島縣平民

世渡谷文吉

阿波國名東郡德島通町九十五番地

賣

坂上半七

東京日本橋區十軒店六番地

棚

鳳文館支店

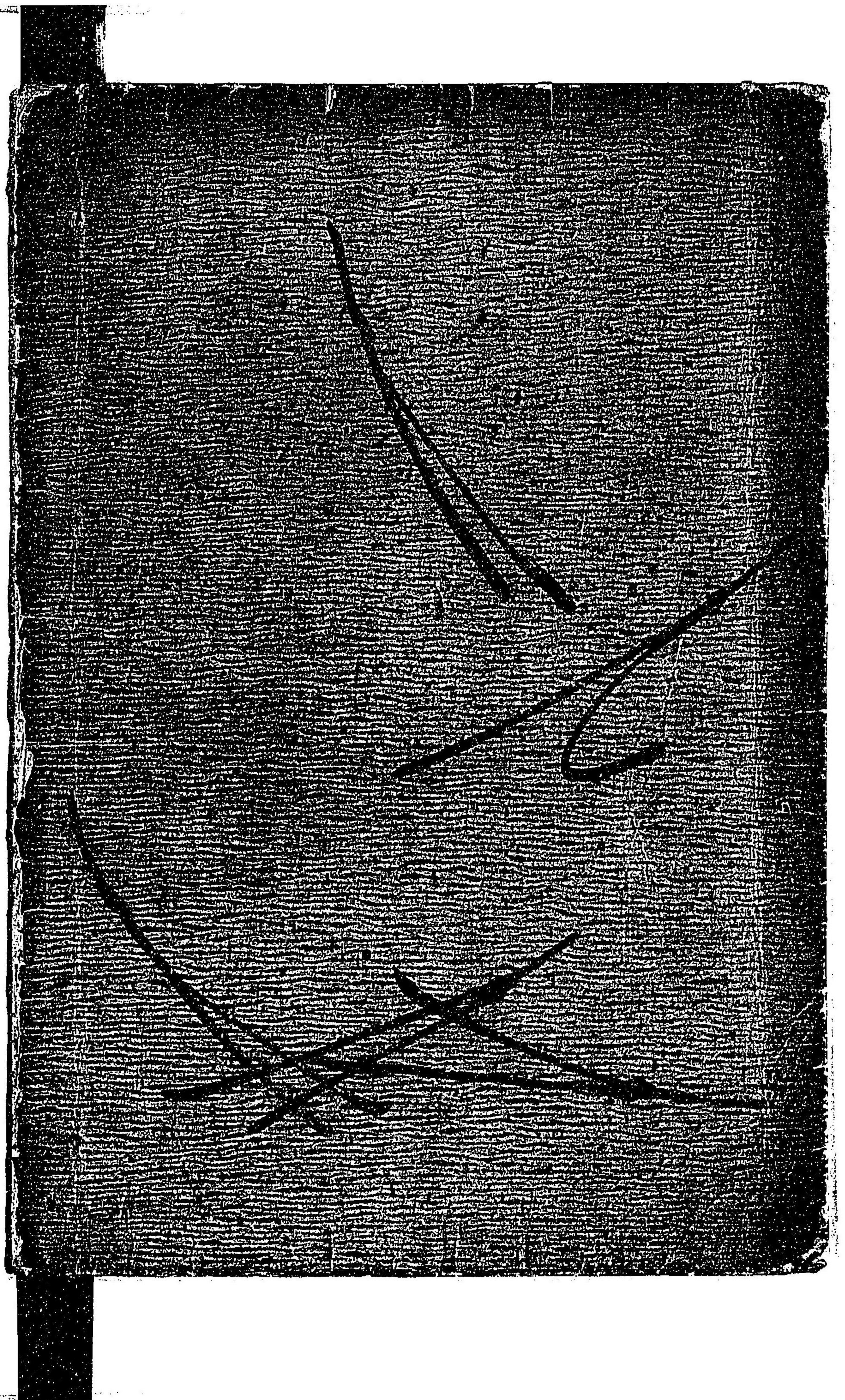
大坂東區唐物町一丁目拾九番地

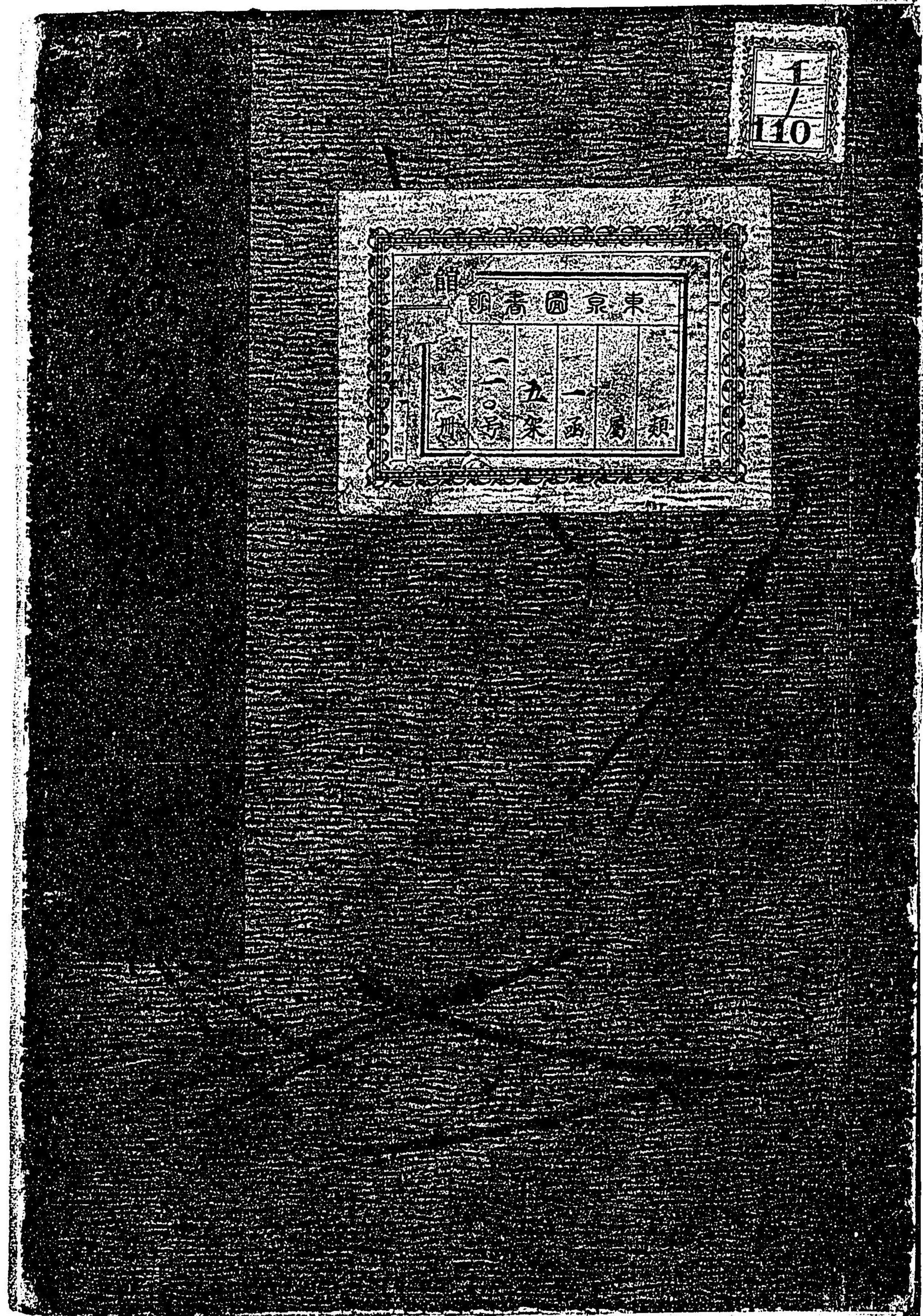
所

杉本甚助

西京下京區第五組辨慶石町十六番地

1
/
110





026127-000-3

1-110

美山路の日記

山田 邦彦/著

M18

ADC-3798

